体験的「被爆７６年」　―核と原発の廃絶へ

竹田雅博　2021.6

（1）原爆直後に生まれて

原爆の直後に、生まれた。子どものころ南太平洋で水爆実験が繰り返され、雨の日は「濡れるな」と注意された。2千回を上回る大気圏核実験が行なわれ、原爆はすぐに核発電、原子炉を積む艦船になり、核時代の世界が続いてきた。被爆76年目の夏、個人的な体験（前半）を思い起こし、「途、なお半ば」の核兵器・核発電の廃絶を探ってみる。

「核の世紀」

「１９４４年、中学生のとき。マンハッタン計画を知るよしもなかったが、『ウラン２３５を応用する爆弾を想定できる段階に入った。その可能性は平和への力か、破壊への力か』という、短いテーマの宿題が出された。翌年８月、ほかならぬアメリカがそれを手にし、日本の都市に使用したという衝撃。恐るべき核の世紀が幕を開けたことを知った」（ダニエル・エルズバーグ『国家機密と良心』）。「２０１１年。核と人類は共存できないと、あらためて強く思った。私の体験から、戦争と核を考えてほしい」（『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』小学館刊、米澤鐵志）。

「原発は破綻した科学技術、事故はかならず起こる」（米原子力規制委員会NRC、グレゴリー・ヤツコ元委員長）。「水と電気が止まれば、原発は原爆と同じ」（樋口英明・元福井地裁裁判長、19年8月6日、広島）。ビキニの証言を続けた第五福竜丸の大石又七さんが、3月に亡くなった。

体験的とは、おもに原爆後10年、20年の記憶に基づく。そして私たちは、このような過去と現在にいる。

語られなかった被爆体験

被爆を証言できる人たち、当時小学生だった人は既に80代半ばを超える。

同世代の知人は２歳で原爆を受け、両親は被爆死した。原爆孤児となり、５歳だった姉と

別々に親戚に引きとられた。「２歳だった、(あのような目に合いながら) なにも憶えとらん。悔しいよね」。小学生から新聞配達を続け、定時制高校卒業の際は「両親がいない」と就職を断られる。結婚のときも難色を示された。別々に育った姉と「初めて、いっしょに旅行に行ったのは 65 歳だった」という。

私の家族や親戚、近所にも被爆者がいたが、ほとんど原爆の話を聞いたことがない。法事など親戚の集まると、「あんとき、どこにおりんさった」「死体を踏まずには歩けんかった」と、ひそひそ声。ラジオからは、「原爆病院で何人亡くなった」とニュースが流れていた。当時、日赤広島病院を、ふつうに原爆病院と呼んでいた。福島事故後に思い出したが、原爆後 10 年ころ、年上の従兄弟たちが東京へ進学し「広島から来たというと下宿を断られた。困ったよのー」と、後に言っていた。

気持ちが悪い原爆ドーム

子どものころ、原爆ドームの傍を通るのは何となく気持ちが悪かった。何度か保存工事が施され、今は少しきれい過ぎるように見える。繁華街にある住友銀行石段に「焼きついた人影」は、そのままだった。71 年に移設され、いまは資料館が保存している。

ドームから元安橋を渡ると、千羽鶴に埋もれる佐々木禎子さんの「折鶴の像」がある。原爆のとき私は母親の胎内、その９月生まれ。家は市内から離れており母親は直接被爆しなかったが、白血病は当時は不治の病気であり、「ぼくは大丈夫だろうか」という不安にかられた。

兄２人が被爆し次兄は死亡、上の兄は重症を負いながら母親の里にたどり着いた。60 歳を過ぎ、「２人以上の被爆者と接した妊婦の子は、胎内被爆の可能性がある」と聞いた。翌日から広島に入った父親や伯父、兄と、母親がどの程度接したのか。「わが子ながら幽霊、看病するのが嫌じゃった」と話したことがある。２、３週間ほど付きっきりだったようだ。父母も、その兄も没し証言できる人はいない。

土蔵にあった黒い弁当箱

父親と伯父は、下の兄の遺体も遺骨も見つけることができなかった。中学校１年生３２０人余は、爆心から約５００メートル付近に集合していた。「模様に見憶えのある」弁当箱に、付近の砂を入れ持ち帰った。弁当箱は古新聞に包んで土蔵の奥に無造作に置いてあった。小学生のころ、たまたま土蔵に入り何だろうと開け、気持ちが悪く元の棚に押し込んだ。その後、取り出されることもなかった。父が 95 歳の高齢になったとき、生き延びた兄が資料館に寄贈した。いまは「全滅した廣島２中の遺品」として収蔵されている（常設展示は同じ２中の折免くんの弁当箱)。

伯父は朗らかで物事にこだわらない人だったが、伯父も父親も兄も、話さなかった。兄は、原爆の話題が出ると不機嫌になる。どこで被爆したのかも、聞かされなかった。「鶴見橋近

くに集合中、ピカッと光った。熱いっ。顔に触ると、ずるっと剥け、直後に吹き飛ばされた」と、わずかに書き残した。66 年後のことである。

「８月６日没」の墓標の列

兄は、広島の新聞社に長年勤めた。広島の新聞として「原爆と核」を、たびたび特集する。どういう気持ちで、その仕事をしていたのか。社屋は、被爆死した弟を含む３２０数人が刻まれた慰霊碑の川向いにある。平和公園の足下には、いまも多くの遺骨が埋もれ、数十の慰霊碑が並ぶ。そこは彼の通勤経路でもあった。日常は、単なる一つの公園として通ったのかもしれない。

広島は浄土真宗の地である。原爆ドームの北に、お寺が集まる寺町がある。寺々の墓地に「昭和 20 年８月６日、７日、８日…没」と彫られた墓石が並ぶ。母親は毎朝、仏壇へお参りを欠かさない人だった。私が中学生のころ、８月５日の夕飯のとき「明日は命日じゃ。丁寧に仏壇に参ってやろう」と、ぽつりともらした。妙な雰囲気に、ふと父親を見ると声を出さずに滂沱と涙している。気拙く、黙って食事を終わった。

後に高齢になった母親は、「あがぁな（あのような）ことは、二度とあってほしゅう（ほしく）ありません」と言ったことがある。

心身の苦痛に堪え、被爆を証言する人たち。その証言と継承は、三たび熱核兵器を人間の頭上に投下させない大きな力となってきた。同時に、語ることなく亡くなった 10 数万の人々、生き残りながら話さなかった人たちがいる。死者は、もちろん語ることはできない。

(2)「核の時代」を終らせるために

違う政治と社会へ

アメリカは人類初の原爆を、30 万人が暮らしていた広島に、続いて長崎に投下した。「広島が軍都だったから」「ヒロシマは加害の意識が希薄である」という意見は、承知している。広島は日清、日露のころから大陸やアジアへの出兵の拠点だった。しかし、近代日本のアジア進出、侵略への衝動と責任は、広島にのみにあったのか。広島・長崎も疲弊し尽し、もはや戦争継続の力はなかった。

米軍はトリニティ実験により、その威力を十分に知っていた。投下は、１発の原爆が都市と数 10 万人の人間にどのような被害効果をもたらすのかを知り、核の独占と戦後世界支配への示威のためと考えざるを得ない。

核とその廃絶について学んだいくつか。一つは、前述の原爆製造から始まった核による世界の支配、核抑止力（という現実と幻想）に抗し、違う政治と社会を求めること。原爆は、すぐにメガトン級の水爆に至った。水爆が抑止力にすらならないことは、その巨大な破壊力と莫大な放射能汚染から自明である。今日的には「使える核兵器」という高性能化や、更新

製造が進められる。核を保有し、自ら核に縛られる世界を見れば、矛盾は明らかだ。

「全廃こそが保証」

昨年、批准国・地域が 50 を超え、今年１月に核兵器禁止条約が発効した。世界にある約１万３千発の核兵器のうち、米ロが９割を保有している。核大国・保有国の“交渉”に任せることはできない。

もとより国際条約だけで核兵器を廃絶することはできないが、条約は核兵器を「非人道、違法」と規定し実験、製造、保有、委譲などを禁じ、「全廃こそが使用されない保証である」とした。多くの国々、地域、人々が「核と核ミサイル、核発電の災厄を廃絶せよ」と声をあげ、行動行動し続ける。その営為、存在を保有国が押し潰すことはできない。

唯一の戦争被爆国である日本こそ、ただちに批准しなければならない。条約への批准・参加を求める意見書が全国１７８８県市町村のうち５６３議会から上がっている（6 月 14 日現在)。日本政府の「(批准は) 保有国と非保有国の溝を深める」とは、詭弁もはなはだしい。ツイッターなどには「愚かな日本、信頼は地に落ちる」「大多数の国民が、忸怩たる思いで核の傘に入りながら核廃絶を支持している」と声が寄せられているという。

近代合理主義に向き合う

もう一つ、科学とは何か。「人間は核エネルギーを制御できない。核と人類は共存できない」と言われる。「化学的結合に比し、核力のエネルギーは桁違いだ。原子核１個、２個であれば、別の原子核に変換することは不可能ではないが、何キログラムもの核物質を無害化することはできない」(『福島原発事故をめぐって』山本義隆）とは、物理学に疎い私にも届く。

２０１０年に広島で講演した高史明（コサミョン、作家）は、「20 世紀は理性と知性、科学と技術を発展させ、世界と日本は侵略と植民地支配を進めた。ヒロシマに至る夥しい犠牲の歴史。日本人民は、その近代合理主義の闇にどう向き合うか」と述べた。その翌年、人類史上初とされる福島第１原発の大事故が起こった。

逃げられない核

私たちは広島・長崎から、繰り返された原水爆実験、チェルノブイリ、そして福島第１原発事故に大きな衝撃を受けた。放射線量の多寡の問題だろうか。大量被爆（注）した広島・長崎原爆と、原発事故の間に 99 年東海村（旧 JCO）がある。核爆発ではなく、ウラン２３５溶液の臨界事故だ。

パシッと青白い光が走り、瞬時の放射線（中性子線）による被曝である。被曝量は、広島の１キロ範囲に相当した。臨界に達したウラン重量は１／１０００g という。放射線、放射

能は大量であれ微細な内部被曝であれ、生命体を根源から破壊する。（注：原爆の場合は、「黒い雨」や翌日以降の入市被爆も「被爆」を使う）。

生活保障、避難の権利を求め、国・東電などの責任を追及する多くの住民訴訟が行なわれている。３月、「（実行し得る）避難計画にはほど遠い」と、水戸地裁が東海第２原発の運転差し止めを命じた。

体験に戻る。よく、原爆が爆発する夢を見た。逃げよう、走ろうとするが「前に進めない」。そこで目が覚める。若狭や原発立地地域に行くと、その建屋に異様な圧迫感を覚える。原爆・核ミサイルからも原発事故からも、逃げられないのだ。原爆は、瞬時に致死量の放射線、数千度の熱、猛烈な爆風を浴びせる。原発事故は長期、広範囲に汚染を広げる。事故は、かならず起きる。

マンハッタン計画で全土に多数のウラン精製工場など核施設を作ったアメリカ、実験場にされた太平洋の島々やユーラシアの砂漠、世界中に原発が建設され事故も繰り返された。核・原発大国は「ヒバク大国」であり、「被爆者・被曝者、ヒバクシャ」は世界に拡がる。

期限を定め廃絶、廃炉へ

非科学かも知れないが、私にとって「核・原爆」は、頭や肩や胸にずっしりと圧し掛かる重石のように続いてきた。福島事故以降、なおそうである。

「原爆も、原発も同じ」であり、小出裕章、河野益近、故・小林圭二らは「もう、汚染した環境に生きるしかない」と述べた。福島事故の２年後ころ、ある勉強会で「表土を除染した方がいいのか、無駄なのか」という質問に、講師の河野益近は数分考えた後、「事故の起こる前なら…、後で考えても…」と小声で答えた。強く印象に残った。

核兵器廃絶と原発廃止の運動は困難を繰り返し、停滞し、また拡がる。人類、生命体と根源的に対立する「核の時代」を終わらせるため、究極の目標ではなく期限を定め、廃絶への道筋を進みたい。２万年後まで禍根を残してはならない。（おわり）

〔核・原爆、原発、放射線にかかわる本は膨大にあるが、今年の夏、３冊を薦めたい。『原爆に夫を奪われて』（岩波新書）、『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』（米澤鐵志、小学館）、『朽ちていった命』（JCO 事故の記録、新潮文庫）〕